



宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

平成に急速に発展している東南アジア諸国の大学とのお付き合いを振り返って	山口 良二
～令和時代の国際協力～	植村 吏香
JICA に足を向けては眠れません	伊丹 利明
世界を視野に地域から始めよう、「宮崎-バングラデシュモデル」の挑戦	河野 久



平成に急速に発展している東南アジア諸国の大学とのお付き合いを振り返って

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長

宮崎大学農学部 山口 良二

令和元年と5月1日からなりました。新しい元号となり、多くのことが何かりセットされたような雰囲気になります。JICA 専門家連絡会結成後24年になります。これまで、国際化、グローバル化というかけ声に、宮崎大学でも留学生を増やし、活動方針にもある様に宮崎県と海外諸国との交流活動の促進、充実に資する活動や会員相互の情報交換・交流・親睦に関することを実施してきました。結成当初は日本にいる外国人も少なく、海外に行くのも決死の思いでした、とは大袈裟ですが、それほど多くの人が海外に行くことはなかったように思います。海外からの日本への旅行者もここ1-2年で一気に増えました。海外からの訪問者が日本に来て感じるものが良く紹介されています。日本はきれいで、整然としており、時間についても几帳面であるといわれています。20-30年前に比べると高齢化社会になり、貴重な若者は成長過程で様々な経験をすると思います

が、日本のこれからの生き方進む方向というのは、さらなる国際化、グローバル化なくしては生きることとはできません。発展途上国と言われてきた国を30年くらい前から訪問してきました。例えばタイでは、最初、30年前訪問した時は、タイでの東大と言われるチュラロンコン大学でさえ、動物病院は小さく1部屋しかなく一人か二人の獣医師で診療しておりました。各研究室の部屋は古く、エアコンもなく、ドアもオープン状態でその頃は研究をしている様子も感じられませんでした。ただし、診断を必要とする病理の部屋だけがスペースが広く、とってあり、スタッフも多く、海外を含めた外部からの訪問者はここを訪れていました。それが、近年では獣医学部だけでも大きなビルがいくつか建ち、動物病院だけでもその一つがタワーのようにそびえ立っています。交通手段としては料金メーターのないタクシーだけが走っていました。が、現在ではスカ

イトレイルと言うモノレールやエアポートリンクの電車が走り、地下鉄ができ、高速道路も早々と整備され、立派なホテルも増え、すでに今では発展途上国ではなくなりました。10-15年くらい前、バンコクの最初のころに近い状態かそれよりももっと発展途上にあると思っていたベトナムについては、訪問したハノイ農業大学 No1（現：ベトナム国立農業大学）の研究室にピペットマンなどなく、ガラスピペットのみで、しかも滅菌は丁寧に一本一本ずつ新聞紙に巻きそれを乾熱滅菌して使用していました。無菌室があり、ラミナフローが設置してあったので感心しましたが、スイッチを入れると埃が立ち培養細胞がコンタミしたのを覚えております。それが、今では、超遠心機やシークエンサーまであります。道路を走っているのはバイクばかりでしかもかなり多く、車は海外からの国際協力団体の車だけであった記憶があります。が、最近では、個人所有者が増え、車が道路に氾濫しており道路の整備が間に合っていない状態です。現在のミャンマーも、これまでのタイやベトナムの発展途上の初期段階のような雰囲気があり、大学でも顕微鏡の一つもありませんでした。

が、少しずつ変わってきております。町中では日本の中古車が数多く走っておりヤンゴンでは道路整備が追いつかない状態で、タイを初めて訪問した頃を思い出すくらいラッシュアワーの渋滞は激しい状態です。そんな状況でありながら、それぞれの国はあっという間に発展してくる可能性を秘めています。これらの国々からの日本への訪問者も多くなり、輸出入も多くなってきました。まさしくグローバル化社会になってきました。さらに国際協力を必要とする場面は数多くあります。

一昨年より、宮崎県 JICA 3 団体合同総会が始まりました。特に、それぞれの団体との交流、懇親会で、各方面のヒトと触れ合うことができました。相互の面識を持つことや親睦もあり、国際化やその経験を活かして啓蒙いたしており多くの専門家は帰国後の各方面で活動あるいは助言し、青年海外協力隊経験者は地域社会への経験を活かした豊かな社会作りを行っています。局面に応じてこれまでの経験や知識を活かして国際貢献を日本への活力へ活かしてほしいと思います。それぞれの会員は自ずと、意識せずその活動をしていると思います。



～令和時代の国際協力～

JICA 九州センター所長
植村 史香

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の皆様、いつもお世話になっております。JICA 九州の植村です。日頃より当機構の事業に対し、様々なご支援を賜り、大変感謝しております。今回、昨年度に引き続き貴会会報へ寄稿させていただくことになりました。

本年 5 月 1 日に、新しい天皇陛下が即位され、元

号も「令和」となりました。自分自身はまさに「昭和」生まれの「昭和」の人間ですので、「平成」をまたぎ「令和」となった現在、一気に年をとったような気がしております。

実は 5 月の連休に家族のいる東京に帰っておりますため、5 月 4 日の新天皇皇后両陛下への一般

参賀に参加して参りました。一般参賀には一度も行ったことがありませんでしたが、当日は日差しもきつく暑い中、たくさんの老若男女が1時間以上日照りの強い砂利の上で静かに待ち続け、混乱も不満の声もなく肅々と参賀が進んでいく様を見て、日本人は本当に忍耐強いな、と思った次第でした。(ただ、残念ながらあまりに暑かったので数人の方が熱中症で倒れていました。) 肝心の両陛下のお姿はほとんど見えませんでした。自分としては新しい時代の到来を実感することができた良い記念となりました。

なお、ご承知の通り、本年4月に入国管理法が改正され、今後、より多くの職種で外国人実習生が日本に来られる方向となりました。近年、宮崎県でも在住される外国人の方が激増していると聞いておりますが、今後ますますこの傾向が高まっていくものと思われます。

各自治体におかれては、外国人の方向けの相談窓口を増設する等の対策を進められていると聞いておりますが、JICAでもこのような動きに対して何らかのご支援ができないか、現在本部を中心に検討が進められています。

また、JICAでも現在、宮崎市内の教育情報サービス様、宮崎大学様、宮崎市様と連携させていただきながら、バングラデシュの優秀なIT人材を宮崎県内の企業等で就職いただくことを目的としたプロジェクトを実施しています。私も初めは「宮崎とバングラデシュがコラボ？」と驚きましたが、バング

ラデシュの方は割とシャイで大人しいので、宮崎県の風土や人と意外と相性がいいようで、宮崎県内で就職するバングラデシュの方も着実に増えているようです。

これ以外でも最近は農業実習生の方なども、かなり増えていると聞いています。

宮崎のような地方においては、これまでは、なかなか外国人の方と会うこともなかったと思いますし、外国人と聞いただけで苦手意識を持つ方も多いのではないかと思います。

このような状況下においては、開発途上国の国際協力の現場で活躍いただいた「派遣専門家OB会」の皆様や協力隊のOB・OGの方々こそが、外国人と日本市民の間の懸け橋となって、活躍いただける機会が増えてくるのではないかと考えております。そのためにはJICAとしましても、ますますJICA事業の強力なパートナーである皆様方とのネットワークを強化していく必要があると認識しております。

これから10年、20年後の宮崎がどうなっていくのかはわかりませんが、もしかするとたくさんの外国の方も自然に宮崎県内で暮らしていけるような時代が来るかもしれません。

そんなことも想像しつつ、これからJICAがどのように日本国内で貢献できるか、真剣に考えていきたいと考えております。どうぞ引き続きまして、ご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

以上



JICA に足を向けては眠れません

福山大学生命工学部海洋生物科学科教授

宮崎大学長顧問 **伊 丹 利 明**

(前宮崎大学農学部教授、前宮崎大学副学長・国際連携センター長)

平成 31 年 3 月 31 日に宮崎大学を退職し、4 月 1 日付けで福山大学に赴任しました。宮崎大学に 16 年 3 ヶ月在職し、最後の 5 年 6 ヶ月を国際連携担当の副学長として勤務しました。副学長在任中は宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の皆様にお世話になりました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。連絡会の総会等で海外のお話をたくさん聞かせていただき、大学の中とは違った『風』を感じていました。

5 月末に福林幹事から原稿執筆の依頼をうけました。はじめての私立大学での勤務ということもあり、右往左往していた時期でした。そのせいで少し提出期限を延ばしていただきました。ご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

さて、本題の JICA と私とのかかわりです。3 つのフェーズに分かれます。①「魚類生理・防疫集団研修コース」時代（昭和 62 年～平成 14 年）、②「トルコ国カレイ類養殖の短期専門家」時代（平成 22 年～23 年）③「副学長」時代（平成 25 年～31 年）

① すべてはここから始まった

－「魚類生理・防疫集団研修コース」時代－

昭和 58 年 4 月に山口県下関市にある水産大学校（農林水産省管轄）に助手で勤務を始めて 4 年後、昭和 62 年から「魚類生理・防疫集団研修コース」が開始されました。このコースはその後タイトルを何度か変更しながら 20 年近く継続しました。私は水産大学校退職までの 16 年間で担当しました。この間平均して 7～8 名の研修員を毎年受け入れたので、私の担当した卒業生は合計すると約 120 人になります。

当時、同年代の研修員とも親しく飲みについて、本当に楽しい思い出です。つたない英語でテキストを作り、超ブロークン Janglish (Japanese+English) で講義をしていました。それを辛抱強く聞いてくれた研修員の皆様には感謝です。その後、研修員の招聘で、フィリピン、タイ王国、イランへ講義に行くこともできました。また、本コースのフォローアップチームの団長としてタイ王国とインドネシアを訪問して、帰国研修員との交流を深めました。



イランでの集中講義での息抜きのひととき。ストロベリー味の水タバコを楽しむ。

タイ王国での活動では、JICA がタイ南部のソンクラ市に建設した National Institute of Coastal Aquaculture (NICA) を拠点としました。これが縁になって近くにあるプリンスオブソンクラ大学 (PSU) との交流が始まりました。このおかげで、宮崎大学在職中ほぼ毎年修士 1 年生の学生と PSU を訪問し、学生による研究発表会を継続して実施できました。さらに、研究交流と学生交流の成果が認

められて、PSU からは名誉博士号と名誉教授の称号をいただきました。これも元をただせば JICA 集団研修での人間関係からのスピノフ事業と言えます。つまり、「すべてはここから始まった」のです。

【余談】 イランは厳格なイスラム国家ですので、アルコールはご法度です。私は3週間イランに招聘されました。その間一滴のビールもワインも飲みませんでした。そのおかげで、帰国後すぐに受診した健康診断の結果は考えられないくらい良い値でした。健康診断前にイランへ旅行はお勧めです。人生のリフレッシュにいかがですか？

このような私の経験から申し上げますと、今から研修コースを実施される方は、若い教員に研修の授業を持たせればよろしい。彼らが築く人間関係はきっと彼らの将来に役立ちます。

② ちょっと怒りました

－「トルコ国カレイ類養殖の短期専門家」時代－

JICA の肝いりで始まったトルコでのイボカレイの養殖事業です。イボカレイは高級魚として流通しており、養殖対象魚種としてはうってつけ。しかし、プロジェクトの最終段階になって魚の調子が悪いとのことで我々魚病学を研究する「病気屋」に声がかかった次第です。私と酒井正博先生（現農学部長）が短期専門家として派遣されました。養殖した魚が病気になるのは良くあることです。ヒトが夏バテをしたり、冬にカゼをひくのと同じです。

事前の調査では、養殖技術に特段の問題はありませんでした。しかし、現実には病気が出ているので、



イボカレイプロジェクトのカウンターパートのアーメドさんとそのご家族と夕食をご一緒する。

原因を探り、対策を立てないといけません。そこで、飼育施設のあるトルコの黒海沿岸の町トラブズンへ行きました。一番の問題は病魚のサンプリングです。養殖技術者は自分の技術に間違いはないと盲信しているので、病気だと認めたがりません。とはいえ、私の到着前に「見栄えの悪い魚」「都合の悪い魚」は処分をしたようでした。それでも現場に行くと、病気の兆候を示している魚を見つけました。早速サンプルとして提供するように申し入れましたが、現場担当者も監督者も頑なに拒否しました。その上司も頑として受け付けません。こちらも「日の丸」を背負ってきている以上、引き下がるわけには行かず、所長と直談判しました。当初は抵抗していましたが、トルコ政府の農水省の事務次官の名前をちらつかせると、シブシブ応じてくれました。幸いにも（？）サンプリングした魚から原因微生物が検出できて、当初の目的は果たせました。しかし、現場でのあまりの非協力的な対応に、私は怒り心頭でした。トルコ政府への報告書には今後このような非協力的な対応のないように申し入れておきました。しかし、あの報告書がどの程度の上層部まで届いたかは知る由もありません。後で聞いた話では、この時期は政府関係者の異動や昇進が決まる『微妙』な時期だったそうです。同じ宮仕えの身としては少々身につまされ

③大学のグローバル化に欠かせない JICA との人事交流

－「副学長」時代－

私は平成 25 年 10 月から副学長を拝命したのですが、前任の丸山真杉先生のと時から JICA との人事交流がスタートしていました。在任中、吉成先生、鹿野先生、そして河澄先生の 3 名の先生方と仕事をしました。吉成先生は JICA 研修のための各種調整と研修管理ならびに宮崎大学の「ミャンマー国ヒ素汚染地域における衛生保健の実施体制強化プロジェクト」開始の支援をいただきました。このような忙しい中でも、先生は医学獣医学総合研究科で修士号をとられました。驚くべきバイタリティーです。鹿野先生には、当時たまたま落ち込んだ JICA 研修事業のテコ入れをしていただくために、新しい研修事業の立ち上げをお願いしました。同時に、上記ミャンマープロジェクトへの支援ならびに SATREPS 案件への事前調査をしていただきました。鹿野先生の的確な情報収集とこれに基づいたご指示のおかげで、次の成果に結びつきました。すなわち、河澄先生の緻密で適切な更なる支援を得て、新たな研修事業と第二次のミャンマー砒素汚染対策事業の開始ならびに SATREPS の採択というすばらしい成果となりました。皆様のご努力に心から敬意を表します。

平成 26 年 7 月に宮崎大学は JICA 九州と「国際協力に関する連携覚書」を締結しました。今やその成果が着々と挙げられています。今後も人事交流が継続され、宮崎大学の国際化が強力に推進されることを期待します。同時に、JICA から派遣される方々

も、JICA での経験を活かして、宮崎大学で何らかの学位を取得されることをお勧めします。まさに吉成先生の修士号取得がロールモデルです。

最後に

つらつらと思い出しながら書いてきましたが、私の大学教員として人生から JICA がなくなったら、何が残るのか？とってしまいます。JICA とその関連の事業が私の人生に大きなインパクトを与えたことは間違いありません。そして、その成果が少しでも途上国の発展に貢献できたら、大きな喜びです。

2016 年 7 月 1 日。「バングラデシュ・ダッカにおける襲撃事件」が起こった日です。7 名の日本人専門家が亡くられました。この文章を読まれるころには、発生から 3 年が経過したころだと思います。あらためて、亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。

宮崎大学では、JICA や宮崎市と組んでバングラデシュからの高度 IT 人材の導入を促進しています（B-JET : Bangladesh-Japan ICT Engineers' Training Program）。テロに負けない国づくりを支援し、日本の地域の発展も支援できるという日本とバングラデシュにとっても Win-Win の関係を築けるすばらしいプログラムです。皆様のご理解とご協力を得て、自立できるプログラムとして大きく育ちますようご支援を賜りたいと存じます。

最後になりましたが、宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の今後ますますのご発展をお祈りしています。福山の方面にお越しの際はお立ち寄りください。



世界を視野に地域から始めよう、 「宮崎 - バングラデシュモデル」の挑戦。

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会幹事

宮崎大学国際連携センター 河野 久

2017 年より、宮崎大学国際連携センターに勤務している河野久でございます。皆様どうぞよろしくお願い致します。

郷里である宮崎県（都城市出身）に戻ってくる前には、中華人民共和国の JICA 北京事務所に勤務しており、中国の対外援助を主管する中華人民共和国商務部（日本の経産省に相当）やアジア開発銀行（ADB）、北京大学を始めとする学術機関などと、今後、日本や中国などアジアの先進国・中進国の経験を如何に Knowledge 化し、アジアの途上国に伝えていくか、ワークショップやセミナーを開催する仕事等を行っておりました。また、中国が打ち出した「一帯一路」や「アジアインフラ投資銀行（AIIB）」等に関する研究も行い、今後日本がどのような援助戦略を持つべきか考察する仕事も併せて行っていました。当時、北京事務所はその歴史的役割の転換期であり、上記のような、従来の JICA 像からやや異なった、チャレンジングかつ、非常に面白い仕事を体験させて頂いたと考えております。



写真 1（北京でのセミナーの様子）

前職では、上述の通り JICA で北京での駐在、その

前には外務省でナイロビ駐在と、たまたまですが活気ある途上国の大都市への駐在が続いており、帰郷するたびに都城市、ひいては宮崎全体があまり元気のないのが気にかかっていました。また、帰郷時に行政や医療従事者として地域に根付き、地域の為に懸命に頑張っている中学・高校時代の旧友たちと飲むたびに「地方が疲弊しているこの状況で、国際貢献をする意味が本当にあるのか？」と何度も問いかけられ、通り一辺倒な説明はするものの、実は自分自身でもあまり腑に落ちていませんでした。JICA 北京に於いて、上述の仕事でいろいろなペーパーを書いていく中で「援助とは何か？」、「今後援助はどのように変わっていくべきか？」と考える時間はたっぷりありましたが、その回答を出せないまま悶々と過ごしていました。

そのような背景もありつつ、子供が生まれたことを契機に宮崎に帰郷し、宮崎大学の国際連携センターの縁を食むことになったのですが、宮崎大学国際連携センターがバングラデシュ ICT 人材育成プログラム（B-JET：Bangladesh-Japan ICT Engineers Training）を実施しており、私の問いへの回答になるかもしれないと考えたからです。既に大学の広報や、メディア報道などでご存じの方も多いかと思いますが、同プロジェクトは、JICA の技協としてバングラディシ・コンピューター・カウンシル（BCC:Bangladesh Computer Council）をカウンターパートに 2017 年に立ち上げられたものであり、バングラデシュ国内の優秀な IT 技術者を対象に、日本市場をターゲットとして人材育成プログラムを実

施することを目的としています。日本語、ビジネスマナーを中心とした3ヶ月の研修プログラム修了後には、日本への就職、留学・インターンシッププログラムへの参加、バングラデシュ国内の日系企業への就職を想定しており、3年間で約300人の就業を予定しています。



写真2 (修了式での様子)

なお、研修後の就職フェーズには、宮崎のIT企業、宮崎市、宮崎大学等宮崎の産官学が中心となり、バングラデシュ人を含む外国人が地域での活躍・定着を目的とした日本ITプロジェクト(JIP)を行っており、そのサポートを行っております。このJIPと前述のB-JETを併せて「宮崎-バングラデシュモデル」が成り立っています。「宮崎-バングラデシュモデル」のユニークな点は、人材育成という途上国の課題解決に取り組みながらも、日本国内、特に地方に普遍的に存在するIT人材不足を解決するという、Win-Winな関係にあることだと考えています。私自身、JICA短期専門家として毎バッチの終了後にB-JETに派遣されていますが、宮崎だけでなく、バングラデシュ側の「宮崎-バングラデシュモデル」に対する並々ならぬ期待、関心を訪問のたびに肌で

感じています。

また、現在、科研費などの外部資金を獲得し「宮崎-バングラデシュモデル」及びバングラデシュ人技術者の宮崎の定着に関する研究を進めているのですが、研究を深めれば深めるほど、このモデルが日本の地域における外国人受け入れ、及び国際協力の一つのフラッグシップ・モデルになる可能性を秘めていると感じています。途上国、宮崎を含む地方を盛り上げるために、今後、私自身強い気概を持って研究に取り組んで行きたいと考えています。

最後に、「宮崎-バングラデシュモデル」をきっかけに、昨日、安倍首相がハシナ・バングラデシュ首相を招いて開催された晩餐会に、本学の池ノ上学長が招待されました。まさに、宮崎大学の理念である、「世界を視野に地域から始めよう」の取り組みが日本国及び相手国から高く評価され、期待されている証左ではないでしょうか。



写真3 (晩餐会の様子)

(引用：内閣府 HP)

https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/201905/29bangladesh.html

編集後記

JICA エキスパート宮崎第 22 号をお届けさせていただきます。今回も前号に引き続き、JICA 九州国際センターの植村所長に特別寄稿をいただきました。また、福山大学生命工学部教授・宮崎大学長顧問（前宮崎大学農学部教授、前宮崎大学副学長・国際連携センター長）伊丹利明先生にはご多忙の中、昨年度の講演内容をベースに執筆いただきました。さらに宮崎大学国際連携センターの河野久氏に宮崎 - バングラデシュモデルに関する寄稿をいただきました。

私達の身の回りでも国際化が進む中、県民の皆様に広く JICA の活動を知っていただき、国際協力の展開・支援を進めて行きたいと考えています。宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会は宮崎県海外協力協会と宮崎県青年海外協力隊を支援する会と協力して合同総会を開催しております。会員の皆様の参加を心よりお待ちしております。本連絡会の活動について皆様のご提案、ご意見をお寄せください。ご連絡は下記までお願いいたします。

会長 山口良二 a0d402u@cc.miyazaki-u.ac.jp
幹事 大野和朗 ohnok@cc.miyazaki-u.ac.jp
乗峰順三 nori@cc.miyazaki-u.ac.jp
佐伯雄一 yt-saeki@cc.miyazaki-u.ac.jp
河野 久 kawano.hisashi@of.miyazaki-u.ac.jp
井上果子 kako.inoue@cc.miyazaki-u.ac.jp
福林良典 fukubayashi@cc.miyazaki-u.ac.jp

事務局：〒 889-2192 宮崎市学園木花台西 1 - 1 宮崎大学農学部内

